

第 1 次新昭和切手

発行年月日	額面	通 称		印刷方式
1946/11/20	15銭	第1次新昭和切手	前島密・人物	平版
1946/8/10	30銭	第1次新昭和切手	法隆寺五重塔	平版
1946/9/26	30銭	第1次新昭和切手	法隆寺五重塔	平版
1946/8/1	1円	第1次新昭和切手	北斎・浮世絵	平版
1946/9/15	1円30銭	第1次新昭和切手	北斎・浮世絵	平版
1946/11/20	1円50銭	第1次新昭和切手	錦帯橋	平版
1946/12/1	2円	第1次新昭和切手	清水寺	平版
1946/11/15	5円	第1次新昭和切手	キンギョ・魚	平版
1947/3/7	10円	第1次新昭和切手	梅蒔絵手箱	平版
1946/11/1	50円	第1次新昭和切手	能面	凹版
1947/1/15	100円	第1次新昭和切手	梅蒔絵手箱	凹版



引用 うめ 切手図鑑 2008

●新昭和切手 (総論) :

分類 : 目打: 菊花紋章: 国名表示:

第1次 (昭21～22): 無 : あり : 「便郵本日」 10円は例外
第2次 (昭21～23): 有 : あり : 「日本郵便」 50銭は例外
第3次 (昭23～24): 有 : なし : 「日本郵便」

目打・菊花紋章の有無で3群に分類している。第3次は僅か4種のグループであり、あえて分類せず、目打の有無で2群に分類することもある。いずれにしても収集家が便宜的に分類したものであり、実際には新昭和切手の使用時期は、第3次昭和 (昭和20～21) や産業图案 (昭和23～25) と重なっており、当然これらの切手は混用されていた。また、第1次・第2次の発行時期は重なっている。例えば、五重塔30銭の「秀山堂」と「有目打・無糊」は、1946年に登場している。

第1次新昭和は戦後の混乱期で、第3次昭和と同様に、告示上の発行日と実際の窓口出現日の不一致がみられる。

第2次新昭和切手14種のうち約半数が告示なしで発売されている。無目打・無糊の第1次新昭和切手に、目打や糊を付けただけなので、当局は新切手として扱っていない。よって正式な発行日はなく、カタログ等では窓口出現日を発行日としている。数字35銭・45銭は、料金値上による差額加貼用である。

第2次新昭和切手は4種とも新切手で、発行告示がある。数字1.50円・3.80円は、料金値上による差額加貼用である。清水寺2円は、告示発行日より3カ月早く出現した。清水寺2円と螺鈿10円は、旧图案を大幅に修正したもの。

塔30銭、1円20銭の料額印面を流用した「切手付封筒」も発売された。多量に売れ残ったため未使用は多いが、使用済は少なく、特に30銭封筒の無加貼使用と、1円20銭封筒の3円80銭切手加貼は貴重である。また印面の切抜使用ができたが、使用例はたとえ郵便でも貴重である。

同時期、北斎1円・金魚5円・清水寺2円・塔1円20銭 (東京切手展記念)・数字3.80円などの印面を流用して安易に製造された記念小型シートが乱発されている。

⇒新昭和切手の時代。

●製造面の特徴

①版式: 第1次新昭和切手は、高額2種 (凹版) 以外はオフセット。印刷局のほか、多くの民間工場でも製造された。オフセット切手の実用版作成には、アーク焼付法、転写紙貼込法が使われた。版欠点や銘版位置の違い等から、各切手の製造所がほぼ解明されている。第2次・第3次は、復旧した印刷局による凸版印刷 (平面版と輪転版) が主であるが、数字1.50円・3.80円などオフセット印刷もある。初雁4円・捕鯨5円・縦螺鈿10円には凸版ゲーベル・平台の両方が存在し、単片でも印面寸法の差で区別が可能である。数字35銭・捕鯨5円など凸版切手の一部には、2種の耳紙 (白耳と霞罫) がある。10円螺鈿の輪転版は希少である。

②刷色: 第1次新昭和切手のオフセット切手は、各工場でインクを調合したため、刷色変化 (色調・濃淡・明暗) が大きい。第2次にも刷色にかなり変化があり、例えば捕鯨5円では、くすんだ薄青と鮮やかな青に区別される。第3次では、1円50銭の濃淡変化が大きい。螺鈿10円はインキが不安定で、水で流れて褪色するなど、変色が多い。

③用紙: 昭和透かし入りの白紙と灰白紙。灰白紙には狭透かしもある。白紙・灰白紙とも白色度は一定でなく、一部の額面では区別が不明確である。第2・3次新昭和切手は、灰白紙が主で、一部の額面に白紙が現れる。初雁4円や捕鯨5円には明瞭な白紙があるが、1円20銭・2円・螺鈿10円 (縦・第3次) では白色度が劣っており、準白紙・粗白紙などと表現される。秀山堂30銭は、厚手の粗雑な灰白紙で脆い。前島15銭・能面50円 (無目打) には横透が存在する。初雁4円と螺鈿10円 (縦) には透かし無しの白紙があるが、一般には「昭和透無切手」として分類している。

④裏糊: 戦後初の有糊切手は秀山堂30銭で、アラビアゴム糊だが、黄褐色で厚く質が悪い。その後、「2号ゴム液」という、サツマイモ澱粉から作ったデキストリン糊が主となる。初期の裏糊は黄茶色で、ザラザラした感じの糊である。縦縞模様があり、塗りムラが目立つ。改良が進み、最後期には無色透明に近い糊も出現した。数年間は、サツマイモ澱粉が裏糊の主役であった。

⑤目打・銘版: 下記。銘版と目打の組合せバラエティを示すには、銘付のペア・田型や10枚・20枚のブロックなどが必要となる。

⑥見本切手：各 300 枚程度が作られたらしい (数字 1.50 円・3.80 円は 500 枚) 。加刷文字の右書「んほみ」 / 左書「みほん」・字体・文字間隔・刷色 (赤 / 黒) などが一定しない。右書・左書は発行順と一致しないが、第 2 次以降は左書である。オークションなどでは 1 枚 5000 ～ 1 0000 円位で落札されている。1 円 30 銭切手の見本は小型シート (東京展) を切り離した単片が多い。五重塔 30 銭切手には、それぞれに見本が存在する (秀山堂・糊無・糊有・凸版左書) 。50 銭炭鋤夫にだけ見本切手が無い。近年、見本切手が数多く出回りはじめ、マルチプルも出現した。

●目打

民間工場の目打機が使われ、様々な目打数・目打型式が出現した。特に塔 30 銭と捕鯨 5 円切手に、目打型式のバラエティが多い。目打・銘版・枠線の組合せが多彩であり、専門的コレクションでは、銘版付き田型・銘付き 10 枚群などのブロックでの収集も必要となる。

また、オフセンターの切手が多く、全てをウェルセンターで揃えるには手間がかかる。

①単線：12 ：上下左右の耳紙に目打が突き抜けている。

②櫛型：13 × 13.5、11 × 13.5：上部耳紙に目打が突き抜ける。

a. 普通櫛型：他の耳紙には目打穴がない。

b. 横抜櫛型：左右の耳紙に目打穴が 1 個出る (変形横抜あり)

c. 下抜櫛型：さらに下部耳紙に目打が突き抜ける。

③全型：12 × 12.5、13 × 13.5：四周の耳紙に目打穴が 1 個出る。

ゲーベル輪転機では印刷に続いて全型目打が施される。

④分割：12 × 12.5：シートの左半分と右半分に分けて目打を施行

○印刷局 ：単線 12 普通櫛型 13 × 13.5 全型 13 × 13.5

○豊国印刷：横抜櫛型 13 × 13.5・横抜櫛型 11 × 13.5

左右の耳紙に目打孔が 1 つ余分に出ているのが特徴。

左右一方の目打を省いた変形横抜櫛型がある。

省いた方は普通櫛型と同じ体裁である。

横抜櫛型 11 × 13.5 は捕鯨 5 円と数字 45 銭に登場。

○共同印刷：下抜櫛型 13 × 13.5。

逆抜櫛型ではなく、横抜櫛型で下耳にも抜けているもの。

○凸版印刷：分割 12 × 12.5 全型 12 × 12.5。

両者は単片では区別不能。

分割目打はシート中央部 (縦方向の目打) の目打ズレが特徴

○秀山堂 ：着色ルレット

○私製目打：無目打は不便なので、郵便局や購入者が目打を施

したものがある。簡易なルレットやミシン目が多いが、

かなし精巧な目打もある。

●銘版：5 種類

⑦造製局刷印 (1944 ～ 47 年)：昭和切手から使用。

能面 50 円 (有目打) の⑦銘版は大珍品。

⑧造製局刷印國本日 (1946 ～ 47 年)：

五重塔 30 銭と 1 円 (濃青) の銘版は、横寸法で 2 種に分類される

短銘：21.8 ～ 22.2mm (初期)

長銘：22.4 ～ 22.8mm

⑨製謹堂山秀山平社会式株 (1946 年)：式の字体で 2 種に区別

⑩印刷局製造 (1947 ～ 49 年)

⑪印刷庁製造 (1949 ～ 51 年)

第 1 次には⑦⑧⑩が登場。第 2 次には⑦～⑪が登場。

特に塔 30 銭と捕鯨 5 円は目打型式と銘版の組合せが多彩。

●変種

①定常変種：

実用版の傷が原因でシートの一定位置に出現する印面変種。

秀山堂 30 銭・左書五重塔 30 銭などに見られる定常変種が有名。

その他の切手には顕著な変種は少ない

②目打エラー：

捕鯨 5 円・数字 45 銭・横螺鈿 10 円・縦螺鈿 10 円に存在する。

③フリーク(「やれ」):軽度の製造エラー

- a. 裏写り:オフセットに多いが、凸版(2円・10円)にもある。
- b. ダブルプリント
- c. 寸詰まり:縦寸法が1〜2mm 短い。
ゲーベル輪転機の回転異常が原因と推定されている。
数字35銭・塔1円20銭・捕鯨5円・清水寺2円に出現。
- d. 用紙裁断異常:福耳つきなど
- e. 目打の一部不足や過多:割に多い
目打ずれ・二重目打・一部目打漏れなど

●使用例と消印

①櫛型印:

A 欄:局名右書⇒局名左書

C 欄:三ツ星⇒都道府県名入⇒復活Z型⇒戦後型と変遷。

50円切手等に電信局・電報局・電信取扱所の非郵便が存在
各種の組合せや変種がある。

局名右書のC欄には、都道府県名入・為替記号が多い

第2次ではC欄三星が減り、局名左書のC欄戦後型が多い。

鉄郵印や年賀図案入は少ない(特に第1次)。

②ローラー印:局名右書/左書/縦書など

印色は黒を主に、紫・青・トビ色などが存在。

昭和22年以前はローラー印があまり造られず希少。

低額面のローラー印が割と少ない。

東京中央局が多い。落合長崎局もよく見かける。

③機械印:

局名右書/局名左書・時刻表示の有無・Z型

標語入・広告入など。希に年賀印もある。

葉書に貼られた1円・1.50円・35銭・捕鯨5円などの他は少なく、
10円以上の額面には殆ど無い。

④欧文印:

a. 欧文櫛型印:NIPPON表示からJAPAN表示への過渡期

NIPPON(ゴム印/金属印)・JAPAN・三日月型

東京・大阪・横浜・神戸の4局以外は希少。

第2次では使用局は増加し、地方局の印もみかける。

b. 欧文ローラー印:希少

戦前タイプの縦型と、戦後の横型がある。

c. 欧文三日月型印:遅くまで使用された一部の額面に存在。

外国郵便が再開直後なので第1次新昭和には少ない。

第2次の頃に外信便が増えるが低額面切手に欧文印は少ない。

○検閲印

1945年10月1日、GHQは郵便・通信の検閲を始めた。特に外国郵便に厳しく、1
円・4円時期の船便書状は大半が開封されている。検閲は1949年まで続けられた。金
魚鉢型の検閲印と、丸型の検閲免除印があり、バラエティが多い。

消印の種類は、中額面の切手は豊富だが、低額・高額切手は種類が少ない。特に塔
30銭(各種)と数字45銭は、消印の種類を集めるのに苦労する。

第1次新昭和切手:高額の10円・50円・100円は使用済が少ない。第1次は、鮮明
な消印が特に少ない。使用済マルチプルでは、金魚5円(糊無)・梅花10円が少なく、
30銭・1円・2円は別納使用が大量にある。

第2次新昭和切手:塔30銭はどれも書状1枚貼が少ない。特に目打有り(#250・#251)
と凸版左書(#252)は難しい(葉書加貼だけは多い)。秀山堂30銭(#249)・数字45銭
(#254)などが少ない。炭坑夫50銭1枚貼私製葉書は日専評価3.5万円。当然といえ
るが、高額切手は国内便よりも外信便が豊富。低額面は外信便が少ない。使用済マル
チプルは、塔30銭目打有などが少ない。数字45銭・捕鯨5円の11×13.5も使用
済マルチプルが少ない。